

【MedTec Forum】 医療科学主専攻の教育評価

有波 忠雄 (人間総合科学研究科・社会環境医学専攻/基礎医学系)

医療科学類の教育は、高度先進医療の現場で活躍する専門職の育成と医療の発展に寄与できる教育・研究・管理に携わる人材の育成を目的としている。教育評価はその目的の達成度で評価される。今後長い期間を経てはじめて評価が可能となる。そこまでの評価は不可能であるが、「授業評価」は看護・医療科学類では自己点検委員会が担当している。ここでは医療科学主専攻のみに限定しないで、看護・医療科学類での授業評価の予定について記し、よりよいシステムを作り上げるためのご協力をお願いしたい。

授業評価は社会的要請であり、その目的は授業方法の改善である。しかし、その改善の評価法は案外難しい。看護・医療科学類を卒業する学生は何種類かの国家試験受験資格が得られるので、その合格率、あるいは合格者数はひとつの目安にはなる。しかし、それらの資格は看護・医療科学類の教育目的のミニマムのものであり、その目安のみでは評価の目的の一部しかカバーしない。

さらに、授業は教育システムによってもねらいが異なってくる。多くの医学部では、講義中心の教育システムから PBL (problem-based learning) チュートリアル教育システムに移行しつつある。そのシステムでは、学生は講義を受動的に受けるのではなく、一つのシナリオから、小グループでディスカッションを重ねながら、何が問題点を自ら抽出し、それを理解するためには何を学んで、何をすべきかを自主的に、能動的に解決していく。チュートリアル教育のなかでは、学生が問題に対する自己解決型の学習方法を習得することを目指しており、その中で授業は最小のコマ数になる一方、授業のねらいもこの学習方法の習得に役立つようなものとなり、知識供与型では目的は達成されない。学生も問題点をすでにつかんでおり、講義の受け止め方は受動的なもの

は異なっている。

看護・医療科学類においてもいずれはこの教育システムが一部取り入れられると思うが、現時点ではほとんどが従来の教育システムである。新しい教育組織であるため、授業評価そのものも本年度に試行が始まった段階である。自己点検委員会では現状を把握しつつ、授業評価を次のように進めていくことにした。

1. 出席表をつける。

今年度は出席表をつけることから始めた。これが授業評価なのかと疑問に思われるだろうが、出席率は一種の授業評価と見ることもできるし、学生にお願いする評価の基礎資料ともなる。ただ、授業方法の改善に役立つ情報はほとんど含まれないので、これ単独では学生の評価にはつながっても授業評価の意味は低い。

2. TWINS による授業評価を活用する

なるべく負担にならず、長期間持続する方法を検討した結果、全学に導入される TWINS による授業評価を積極的に活用することにした。

全学の授業評価は共通科目(総合科目、体育、外国語、情報処理、国語及び教職に関する科目)に対して行われている。それを看護・医療科学類では、本学類開設科目(Qで始まる科目)も、同時に評価してもらうことにした。具体的な項目は以下のようなものである。

平成 16 年度全学授業評価のアンケート項目

1. から 5. の大項目の各々の小項目に対して、次の 5 段階に 0 点 (分からない (該当しない)) の 1 段階を加えた計 6 段階評価をつけてもらう。

(評価)

- 5 強くそう思う
- 4 そう思う
- 3 どちらともいえない
- 2 そう思わない
- 1 全くそう思わない
- 0 わからない (該当しない)

1. 授業内容

- (1) この授業のねらいや学習目標は明確であった。
- (2) 授業内容はシラバスどおりに行われ、まとまっていた。
- (3) 授業内容はよく準備されていた。
- (4) 教師の説明は論理的で説得力があった。
- (5) 授業の進度や時間配分は適切であった。

2. 授業方法

- (1) 授業の重要なポイントがわかるように工夫されていた。
- (2) 教師の声の大きさ・話し方は適切で聞き取りやすかった。
- (3) 黒板やスライド・OHP 等の使い方あるいは資料提示などは適切であった。
- (4) 教師は学生の自主学習を促すような工夫をしていた。

3. 授業姿勢

- (1) 教師の授業への取り組みは熱心で意欲的であった。
- (2) 説明はていねいであつ具体的でわかりやすかった。
- (3) 教師は学生の質問や疑問に適切

に対応していた。

4. 授業参加

- (1) 私はこの授業にもともと興味をもっていた。
- (2) 授業中、私はこの授業に集中していた。
- (3) 私はよく質問したり意見を述べたりして、授業によく参加していた。

5. 授業全体

- (1) 授叢内容は全体として適切であった。
- (2) 教師の授業方法や授業姿勢は主体として適切であった。
- (3) 私の授業への取り組みは全体として適切であった。
- (4) 私はこの授業を受けて、この分野に対する興味が増した。

2 学期分の TWINS の入力 は 12 月 2 日 2 時 限目と 12 月 3 日の 6 次 限目になるべくしてもらおうが、時間の都合の悪い人は 12 月中は入力可能である。

最後に、授業評価について、評価する側、される側のいくつかの疑問を列挙し、その考えの一例を挙げ、教員と学生が相互に討論を重ねて、よりよい教育システムを作り上げる一助としたい。

授業評価は本当に必要か?

この点については、時代の要請であり、教育評価は常に評価の視点を導入することにより緊張感を維持できること、評価する側が評価される側の視点で見ることにより改善が容易になること、学生は将来評価をする立場となることが増えるのでそのトレーニングともなること、などの効用がある。

授業評価は誰がするか?

匿名性の確保は重要である。成績を人質に

取られている学生は匿名性が十分に保証されない限り、否定的なコメントを書きたがらない。しかし、これには解決の手段がある。根本的な問題は、評価は出席していることが必須の条件であり、かつ内容に関心がなければ実際の評価は難しい点である。学生は授業を受ける権利があり、評価する権利があるが、学生全体が下す評価の意味付けはこのような理由で難しい。すでに行われているように他の教員による評価も加えるべきであろう。

授業評価の基準はなにか？

授業は何を基準として評価されるべきか。本来は学習効果であろう。それならば、学生の成績評価がそれに相当するので、わざわざ授業評価をする必要はない。落第点をとる学生がいるということは相対的に自分のレベルが判断できない学生がいるということも示しているが、その人達にとって学習効果は判断できないということになる。

では授業のわかりやすさを基準とするか。授業の内容は学生がすでに知っている割合が多くなればなるほど分かりやすさの割合は増える。未知のものを知る、という授業の目的のひとつはこれでは評価できない。では満足度か。満足度は主観的であり、実に学生の関心による個人差が大きい。結局、教員への人気投票に近いものになる危険がある。

評価点数化に関する疑問

TWINS でもそうであるが、通常、学校の通信簿のように5段階評価をしてもらおう。上位何%が5のような相対評価ならまだ意味があるが、この場合は基準がないようなものである。基準を示さず、5段階評価しろというのは、仕方ないとはいえ、無理難題をお願いしている。